

1960年代の青森県陸奥湾。米軍基地から年中間こえてくる、ジーブの排気音、飛行機の爆音を聞きながら、彼はその幼少時代を送った。

彼は音に対して想像以上の興味を持っている。若い頃、どんなに頑張っても追いつけなかったアメリカの文化や文明に憧れていた事も、全て基地から洩れる彼の心をくすぐっていた様々な音が、要因であったのだ。

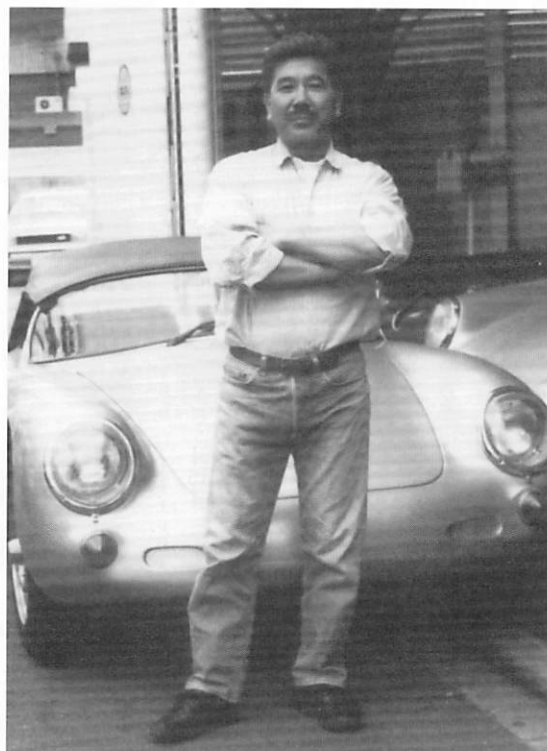
彼は今、主にボルシエやワーゲンのレストアを手掛けているが、メカを触るようになったのは、彼がまだ青森にいた20才頃の事。そもそもは、米軍基地で迫力のある音をたてて走るジーブに対する興味に始まる。要するに、彼がレストアするのは、車のディテールより音。音をチューニングしているようなものなのである。エンジンの音、クラクション、ドアをロックする音や風を受ける音……。あらゆる音が重なり、ひとつひとつになって彼の求める音を作りあげる。それは彼にとって幼少時代に感じたあの音を再現したいが為なのである。

音に対しては決して妥協しない。と、まわりからは頑固な男に見られるかもしれないが、彼にとって、その時代に聞いていた様々な音は、それ程までに偉大だったのである。

彼の音に対する異常なまでの執着心は、いいスピーカーを見つけて購入したのはいいがあまりにも大きすぎてマンションのエレベーターに乗りきらず人に預けてある、という何とも間抜けな話まで引き起こしてしまう程である。その巨大なスピーカーで、昔よく耳にしていた、ベンチャーズの音を聞きたかったそうだが、そしてあげくの果てには、ジェットレンジジャー206、というヘリコプターのラジコンまで、自分でチューニングし、求める音

に限りなく近いものをつくりあげて飛ばそうとする。彼を見ていると、車を始め様々な物をレストアする事によって、昔の憧れ

の音を具象化し、あの頃、あのあたりにしていた、日本にはなかった文化、文明を、一つ一つ確かめているように思えてくるのである。



## 村田一 音のレストア。 遠い日のアメリカを求めて。

Hazime Murata

LEADER

# ALL SORTS OF KYOTIAN

text by Keiko Shirai

FLAT4でワーゲン、ボルシエ等のレストアをする。オペンチャラーズというバンド名で毎週水曜日の夜、嵐山のコルドンに出演している。とことん、音にうるさい彼。